「分け隔てない神」　　２０２６年６月７日　　主日礼拝
使徒言行録　第１０章３４～４８節

先週、私たちはペトロの見た幻からご一緒に学びました。ペトロが見た幻は衝撃的なものでした。神様から屠って食べよと命じられた布の中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていたからです。旧約聖書のレビ記１１章には、清い物と汚れた物に関する規定が記されています。食べてはならない汚れた動物の中には、らくだ、岩狸、野うさぎ、いのししが記されています。水中の魚類では、ひれやうろこのないものはすべて汚れた物とされています。うなぎやあなご、タコ、イカ、エビ、カニはすべて汚れたもので食べられないことになります。私の大好きな食べ物ばかりで、日本人にはこれはとてもたいへんなことになります。他にも、鳥や昆虫、爬虫類の汚れた物の名前が記されています。イスラエル人はこれらの汚れた物を一切口にすることはありませんでした。そのような汚れた物がたくさん入っていた布の中身を、主が屠って食べよと命じたのです。ペトロは敬虔なユダヤ教徒でした。キリスト教はもともとユダヤ教と同じルーツを持っていましたので、律法を重んじるユダヤ人は、律法で禁じられている汚れた物を決して口にはしませんでした。その汚れた物を屠って食べよと、神様は命じられたのです。ペトロの慌てぶりが目に浮かぶようです。そんな幻が３度も現れました。この幻はいったい何だろうかとペトロが思い悩んでいると、ローマ兵の百人隊長のコルネリウスから会いたがっているという連絡が入ってきました。コルネリウスは異邦人でしたが、神を恐れ、信仰心の篤い人でした。

この当時、異邦人を受け入れるということがどれほどたいへんだったのかを現わす記事が、今日の聖書の箇所の少し後、使徒言行録１１章に出てきます。１節以下にはこんなふうに記されています。【さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人も神の言葉を受け入れたことを耳にした。ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。】　この当時、神の民のしるしとして割礼を受けていたユダヤ人が、割礼を受けていない異邦人と一緒に食事をすることは禁じられていました。

今から１５年前、２０１１年３月１１日、東日本大震災が起こり、関連死を含めると死んだ人たちは２万２千人にも及ぶそうです。その後、外国人の被災者たちに関する問題が提起されました。外国人の人たちに正しい情報が伝わらなかったという問題です。言葉の問題、日本の習慣や常識が分からず、テレビを見てもその内容を十分に理解できず、どこに避難したらよいのか、食料や避難所などどこで命をつないだらよいのか、そんな情報がいきわたらなかったという問題です。被災地に住んでいたある外国人の方が、テレビで「避難」という漢字を見て、その意味が分からなかったと語りました。「避難」という漢字は「避ける」と「難しい」という漢字の組み合わせで、避けるのが難しい、と読んだ外国人にはその意味が通じなかったのです。

そして今、コロナ禍の中で、外国人の間に同じようなことが起こっていたことが、問題となりました。日本でのコロナの情報はほとんど日本語でしか報道されず、外国人にとって深刻な情報不足が起こりました。加えて、医者にかかる場合の医療現場でのコミュニケーションに対する不安もあります。体調不良を覚えた外国の人たちが医者にかかって自分の症状をきちんとわかってもらえるのか、また医師の言うことが正しく理解できるのかと

いう不安。これらの情報不足に加え、コミュニケーション・ミスによって引き起こされる不安やストレスを分ち合える仲間がいない、という状況が起こりました。言葉がなかなか通じない社会での災害は、私たちが想像する以上にたいへんなものがあるのでしょう。

イエス様が復活されてから５０日後、ペンテコステの日、聖霊が降った弟子たちは外国の言葉で福音を語り始めました。自分の国の言葉を相手に理解させるのではなく、相手の国の言葉で、相手と同じ土俵で福音を語る。これが聖霊の働きでした。

使徒言行録８章に、サマリアの人たちにイエス・キリストの福音が宣べ伝えられていった様子が記されています。サマリア人はユダヤ人からたいへん嫌われていました。けれども、もともとルーツは一緒でした。北イスラエル王国のユダヤ人としての血を引くサマリア人は、律法で禁止されている他民族との結婚を行っていきます。他民族との結婚は、他民族の宗教や神々をも導きいれることになる恐れがあるための禁止されていたのですが、北イスラエル王国が滅亡した後、その地で北イスラエル王国の生き残りの人たちが生き続けていくために、その土地の他の民族の人たちと結婚を繰り返していきました。それがサマリア人でした。ですから彼らは、聖書の重大な律法を守らなかったということでユダヤ人からは嫌われていましたが、それでも根っこでは繋がっていました。根っこが繋がっていたから余計嫌われる対象になっていたのかもしれません。それはともかくとして、使徒言行録８章でイエス・キリストの福音が宣べ伝えられていったサマリア人たちは、もともとはユダヤの血を引く人たちでした。

サマリア人にイエス・キリストの福音が伝えられた後、使徒言行録８章２６節以下で、エチオピアの宦官がフィリポによってバプテスマを授けられる話が載っています。このサマリア人とエジプトの宦官の話を経て、使徒言行録１０章では、コルネリウスとペトロが見た幻の話が出てきます。ユダヤ人以外の外国人への宣教とバプテスマは、これらの出来事から始まっていったのです。そしてそのおかげで、こうしてイスラエルから遠く離れた私たちの国においても､イエス･キリストの福音にあずかる恵みをいただいているのです。

先ほどお読みいただきました今日の聖書の箇所は、先週学んだ箇所の続きになります。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない」。ペトロが神様からいただいたこの言葉を受け､ペトロはイエス･キリストの福音を語り始めます｡その冒頭で、ペトロはこう語ります。３４節、【神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。神がイエス・キリストによって――この方こそ、すべての人の主です――平和を告げ知らせて、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、あなたがたはご存じでしょう。ヨハネがバプテスマを宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。】

異邦人である外国人が、神の救いの約束に入れられた。それはペトロにとって驚きの出来事でした。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない」。それは神様からの命令でした｡そしてその根拠は､イエス･キリストの受肉と昇天にありました。

イエス・キリストは、天と地を創造された創造者のもとから降ってこられました。私たち人類を救済するために降ってこられたのです。イエス・キリストは神が選ばれた民、イスラエルの民の中にイスラエル人として生まれましたが、十字架の贖いの後、救済の出来事を成就したあと、天と地の創造者である神の元へと再び昇っていかれたのです。ですから、イエス・キリストの昇天という漢字は、天に昇ると書きます。私たちキリスト者の召天は天に召されるという字を書き、神様が天から召してくださらなければ上っていくことができませんが、イエス・キリストは御自身で神の元へと昇っていかれた。帰って行かれたのです。それで、イエス様だけ特別に、天に昇る昇天という漢字を使うのです。

天地創造の神から遣わされ、天地創造の神の元へと帰って行かれたイエス・キリストが、十字架において成就してくださった救いは、当然、神様が造られたすべての民に及んでいます。すべての人に救いが及んでいる。エフェソの信徒への手紙２章１１節以下では、こう語られています。新約聖書３５４ページです。【だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きてきました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。】

さて、今日の聖書の箇所で、ペトロはこう語っています。【神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。】　ペトロは、幻を通して、またコルネリウスを通して、変えられたのです。それまで、清くない者、汚れている者とされていた異邦人が救われることなどありえないと考えていたペトロでしたが、すべての国の人が救いにあずかることができるということを教えられたのです。つまり、ペトロが語っているこの福音の言葉は、ペトロ自身の悔い改めの言葉なのです。それまで、自分たちユダヤ人だけが神に選ばれ救いにあずかっていることを疑わなかったペトロが、ユダヤ人ではない異邦人も救いにあずかることができると教えられたのです。ですから、今日の聖書の箇所４３節でペトロはこう語っています。【また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。】　こうして、天地創造の神の元から降ってこられたイエス・キリストは、すべての人の主となられたのです。

神は人を分け隔てなさいません。今日の聖書の箇所では、それは異邦人に対して語られています。外国の人たちのことはもちろんですが、異なる性に対しても神は分け隔てされないことを、私たちはよく覚えておきたいと思います。特にこの日本の社会においては、いまだに女性が分け隔てされている現実があります。さらに、男性と女性という二つの性では分けられない方々が、マイノリティとして大きな差別や被害を受けています。その他にもたくさんの分け隔てが、私たちの社会には歴然として存在しています。人を分け隔てされない神様は、この世で分け隔てされている最も小さい者たちと共にいてくださいます。私たちは、このような社会の中で生きているキリスト者として、人を分け隔てされない神の思いを現実のものとするために、どのような生活を送っていけばよいのでしょうか。

そのために、まず私たちの神戸西教会が、神様の思いに従って、人を分け隔てしない教会として立ち続けていきたいと願います。　　お祈りしましょう。